



朝本

醉菩提

冬



特
3047
10

あんどやとくバ。亦六髭とか一抵て。ワうさぬわとハ元且げんよしな。よ。せめて。髭ひげ
みとわうじう。剃て年とむくえん。あうぶのむくひなれば。於三輪へ手繰てり
あしどく。鹽湯と汲持来りて。毛うけに持て古扇のうく櫛匣くしげ合砒あひせふ
剃刀てり研て亦六が背後うしろ不立髭と剃て居る。折をりか。竹林たけのこのあうりひて。雉けし
二三声鳴といとく。少の地震ちしんやうくとあひるが。於三輪へよて地動ちどう
とまうひけい。あやと驚おどろきあやまらて。亦六が吼うなのあうりへ。剃刀を
さうつけいれべ。さうゆち鮮血せんけつ淋々と。むく鹽しんは流ながる。於三輪へあや
驚おどろて。大あやわまらとあうる。あやめんとあてまどひ。血ちどりの棄すへ
何なんうあふと。立騒たちさわぐ心もあうで。宵寐よみまどひの杉太郎すぎたろう。あやめへん
寐みさうてと。いひつ社やしろにとうする。亦六は血とかいのひ。とく一の疵きずう
さうとく。さう。杉太郎すぎたろうと寐みさうとく。いひつ疵きずるさう中過すかくさふ。

何者なにか必かならずと四辺よっぺんと見えたる一老ひとふきど。夜よいまんくと更あけなり。空そら吹ふ風の音おとのうへて人音ひとのおともあなりければ。云我わが心のおれあて。ひき耳みみなりとあて。あひて。再また又またととりあけて。南无阿弥陀仏なむあみだぶつの声こゑなりと云。腹はらうき切んとあてりたるに。又声こゑありて亦六またむまで亦六またむまでとととあてり。亦六またむいふと云く声こゑせり。方かたと云てり見りたるに。あ首くびとまりたる所の小屏風こひさうぶのうちより。青あおき色の陰火いんか閃々ひらひらと然しか上りければ。大おほ又驚おどろき立上りて屏風ひさうぶと引あけ。消滅しょうめつする灯明とうめいの光ひかりよりととと。あ怪あやしや。香花かうげと手向てむけて祭まつりあたる。あか生首なまぐし眼まなこと見えり。さ口くちととと。活いけるが如ごときわりとぬるれば。さうの強氣かうきの亦六またむあてり。ととと。あ首くび又声こゑと祭まつりしてひきたる。誂しらあつた理ことわりあり。法身ほふしんの自殺じそくととと。あ我わが身の懺悔ざんげと一通りまて。云某それいられ医師いし竹齋ちくさいが一子ひとりありて。幼名おななと號なづ馬



本朝
 野
 苦
 提
 卷
 之
 八

わさうにて自刃首とまききうて亡一ヶ人もあはれは赤子の手より。此家は来りて亦助どの位牌はむろ。面目あさふ。我若生て此家にあさむ。仇敵とて打るべき。おん刃の爲は祭まで。回向とらるる苦まん地獄の呵責にまききうる。小山三どの頭痛のあやふ。我誓て平癒のじむべ。自殺のまへはあまからにさむる。おん刃の義気とるふ。つけ我生前の非義非道と後悔されどもさうぬ死してさうく善とせんと。永劫悪趣の苦とをのぞきまへは。我此物語と丑の人に傳へ。あひて勸懲の一助とせむ。あはれとて。両眼より涙とらるる。落しきか。再又いさる。今日。閻王のゆは。とうけて亡者の婆娑と来る。いされ。我も魂魄頭は歸して委細と語り。おん刃の自殺とさむる。諺々もさむる。あはれとて。目とさうさぬ。亦六これとて。驚嘆。

さる父と害せしむの者あり。され又竹齋が子なりしうさわれ、則合敵誅是
悪因縁の集會あり。さるわれいそひも我一旦天地に誓ひ言を争
背べさとあひつゝ又又とさうあづけにわれまらぬちべくんと声けりて於
三輪杉太郎と抱てそよく走り出亦六が持つる刀とりきりて我吼は
つきとせんともうられ、亦六へわてまどひて手をとるへん何ゆゑの
生害ぞやといふかれ、お三輪より始終の更と奥ひで隙をすくぬらん才
妻が父と討多ひへ原のやまちあてなさき一と疎な禁野へ殺生禁断の地
あて人のへまわさへざる所とは父の所へ入るへ其才も又あやもうあらに
わろど疎更妻が危き令とをいひあがりてこれまで乃歩厚恩いつであ
敵と云ふべき。われあるへ妻が兄就九の首をあ男ども敵ある一。
さわれ、妻へもん才の爲は現在敵の妹なれば、いつでもれといふべき。

言と授めべ七者。どりのあかめりぐやとつひて。残るめき消て失ふ。ろ。
 くて亦六が門首は立ぬ。内の子。提子とて。ひめ。うて老女へ猶昔は。小
 いひる。へ我へ原都五条坂は住。百魔とて。白拍子。ふて。め。ろ。
 大和國。枕々木の家臣。不破道大。とて。人。は。わ。ひ。う。て。妻。と。あ。
 懐胎のう。か。め。あ。り。て。い。な。と。う。け。わ。ど。く。木枯竹齊の方へ縁づき。産
 か。と。て。男の子。これ。道大。が。産。れ。と。竹齊。が。子。と。な。て。育。る。我。元。来
 志。め。く。夫。う。と。ま。れ。い。な。と。も。く。連。る。あ。う。の。う。と。ま。れ。い。な。の
 男子。二歳の時。其子へ。残。い。お。我。才。独。出。奔。其。後。胸。毛。の。黒。平。と
 つ。者。は。再。縁。し。て。名。を。岩。と。し。大。和。國。二。上。が。嶽。の。辺。に。住。む。ゆ。え。あ。り。て
 の。地。と。遊。去。越。後。越。中。の。堺。安。計。呂。山。に。い。れ。住。異。名。と。百。魔。山。焼。と。い。ふ。れ
 人。商。人。と。業。と。な。し。非。道。の。金。を。貯。り。有。漏。路。太。郎。同。き。五。郎。と。い。ふ。兄。弟。の

者。小。其。金。と。残。り。奪。と。し。と。や。う。く。一。つ。の。と。ま。て。其。後。当。國。は。来。り
 此。村。を。去。り。任。仕。ぬ。後。く。三。歳。の。と。れ。竹。齊。方。に。残。い。お。我。と。い。ふ
 男子。勘。當。う。け。て。行。方。ち。ど。り。ろ。其。男。子。の。幼。名。は。鷲。丸。成。長
 と。て。提。婆。仁。三。郎。と。い。ふ。今。夜。も。ど。て。さ。り。ろ。三。歳。の。時。別
 ち。我。子。と。い。ふ。ろ。親。の。と。ろ。子。の。首。と。五。索。子。の。錢。を。か。え。賣。と。い
 う。わ。さ。ぬ。さ。れ。年。来。の。惡。報。と。い。ふ。て。悟。る。物。語。又。これ。ろ。か。三。輪。の
 後。妻。の。腹。は。出。生。の。女。子。と。い。ふ。兄。弟。と。い。ふ。と。て。提。婆。と。い
 ぬ。も。腹。も。あ。り。て。敵。は。つ。る。縁。と。い。ふ。ね。ば。自。害。と。い。ふ。り。や。未。だ。ろ
 つ。と。い。ふ。れ。懺。悔。の。為。に。我。つ。り。罪。科。と。残。り。語。て。さ。る。我。人。は
 雇。は。賃。仕。吏。の。と。い。ふ。日。の。費。は。と。い。ふ。夜。は。平。岡。明。神。の
 神。灯。の。油。と。い。ふ。森。酒。と。い。ふ。栄。耀。飲。今。と。い。ふ。と。も。あ。る。と。い

けふべき詞いふれどし。又今夜も涼夜に來りて。此竹林に隱居し。此家小くもいれり。了角の若人。不破道大が為。恨む。名古屋内。二郎が。一子。小山。之。あり。と。言。ふ。や。あ。の。び。入。て。寐。首。と。り。雉川大領の飯。持。泰。之。て。褒。美。の。金。と。な。る。べ。し。と。あ。い。れ。此。通。り。弁。と。い。ふ。人。來。る。あり。然。小。内。の。孫。子。と。う。か。ひ。始。終。の。り。と。言。提。婆。仁。之。郎。自。殺。し。て。善。又。歸。し。る。後。悔。の。物。語。に。も。ど。て。我。子。と。い。ふ。と。り。六。十。年。來。と。い。ふ。惡。念。と。唯。一。時。に。の。ど。く。と。善。に。あり。此。自。害。懺。悔。又。罪。と。滅。と。い。ふ。ど。天。罰。神。罰。仏。罰。と。深。く。う。け。る。我。が。れ。を。无。間。地。獄。と。落。て。无。量。億。劫。呵。責。の。苦。と。ま。ぬ。や。い。ま。あ。る。べ。し。と。い。ふ。ど。亦。六。十。の。此。芥。子。と。我。子。に。う。る。老。が。と。段。々。に。斬。る。て。父。の。仇。と。報。う。る。と。い。ふ。と。い。ひ。と。り。芥。と。取。て。殺。す。合。掌。し。て。口。は。念。仏。と。い。ふ。と。亦。六。夫。婦。の。

これと。さ。て。い。く。と。あ。い。と。て。手。負。と。い。う。居。る。に。小。山。三。病。床。と。立。出。て。夫。婦。に。む。の。始。終。と。い。く。れ。や。と。い。ふ。不。思。議。の。我。頭。痛。今。俄。に。平。愈。て。常。の。ど。く。と。い。ふ。れ。亦。六。十。と。い。ふ。た。提。婆。の。詞。果。て。い。ふ。と。い。ふ。と。夫。婦。と。も。に。愁。の。あ。る。喜。び。あり。前。程。より。門。首。は。う。と。い。ふ。と。い。ふ。一。休。和。尚。此。時。突。然。裏。に。入。て。上。坐。し。通。り。我。は。近。頃。当。國。は。和。錫。の。沙。門。一。休。あり。と。い。ふ。と。亦。六。夫。婦。小。山。之。も。頭。と。さ。げ。こ。の。あ。い。と。い。ふ。と。一。休。禪。師。と。い。ふ。と。教。へ。手。負。の。老。女。に。こ。れ。と。言。さ。て。い。う。け。と。い。ふ。と。一。休。禪。師。と。い。ふ。と。折。に。あ。い。と。い。う。と。い。ふ。と。妻。の。罪。除。き。者。と。い。ふ。と。移。り。て。來。世。乃。苦。患。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。一。休。と。い。ふ。と。我。は。名。が。輪。廻。の。一。轉。と。先。知。し。て。濟。度。の。為。に。來。る。と。い。ふ。と。汝。若。や。り。と。い。ふ。と。百。磨。と。い。ふ。と。白。拍。子。と。い。ふ。と。わ。り。け。る。は。汝。が。あ。い。と。い。ふ。と。曲。舞。と。い。ふ。と。此。世。の。名。跡。と。い。ふ。と。

我ワキ僧の意ゆて助声とつらき。あゝの夏う法あゝぬ。とくくと
のさまへびくへとく。辞しうばあそじや。来世の為やわ。つらきと。
手りねのりの扇と取て立上り。倭僧足と踏あて。とらきうりも
とまくと髪あかろの雪とく。眠ハ涙の雨雲に星とく。さるふせ
ゆて。顔ハ血あに赭丹塗の流て襟ふつ。葛襦袢の腰の破るハ木の葉
衣に異うと折しも里の夜神樂に称宜の鼓や吹笛の時の調子も更
り。声と安計呂の山姥の息の下う。うん声。

遠近のたうとあゝぬ山中に。あゝうも呼子鳥の声をく折く。
伐木丁々として山うに幽う。法性峯をびえて上末菩提を顕し。
无明谷深きうとわハ下化衆生と表して。金輪際及べ。
とくうのて舞えれば一休助声。あゝて。

柳山姥ハ生所もあゝど宿もなし。唯雲水を使ひて。うゝぬ山の奥もなし。
老女又うゝ

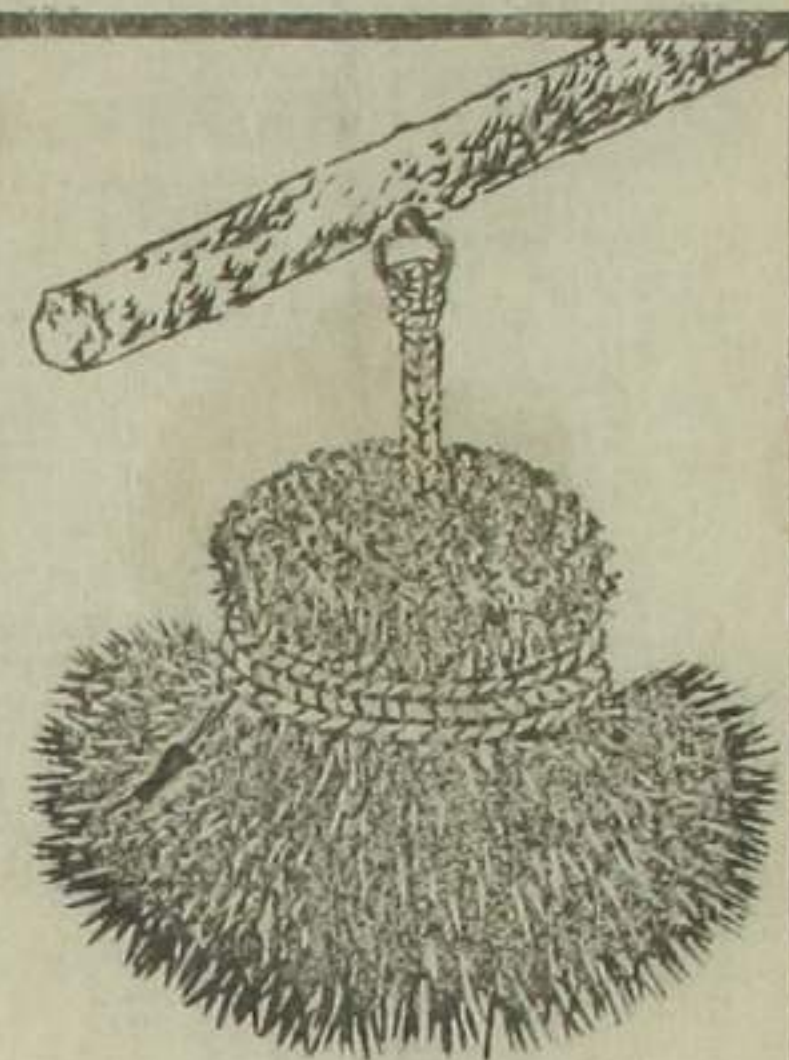
然ハ人間にのどとて隔る雲の月とわえ。うに自性と変化し。
一念化生の鬼女とあて。目前に来きども。

一休又助声。あゝ

邪正一如と見る。色即是空其終又仏法われ。法あり。煩惱
あれハ菩提あり。仏あれハ衆生あり。衆生あれハ山姥もあり。柳ハみどり
花ハ紅のいろく。

老女又うゝ

うゝあ。曳の山姥ハ山廻るど苦き。足曳の山廻一樹の陰一河
の流皆是他生の縁ぞし。もてや我名と夕月の浮世とわ。一節も



酒賣亦六ヶ妻
於三輪悲歎
あせ湯も

雇の貧老女先非と
餓梅して自害と
一休師因果
輪廻の理と
説いて引導の
語を授けり



偏盲の雉子
死して一箇の
心火を去る



木仏と焼く夏なり。我今百魔山姥提婆仁三郎と云ふ二体の真の仏と
つらんと云へり。假の木仏と云ふまゝや。仏も下駄もあは木のものに
ゆゑや。さう。同ぜよといふ。あつむとを得。お三輪自在竹又陶器
でうまつけ。お木仏と新とほし。一休へ木仏の然るて見ぬ。掌と打て
大は笑ふ。時又彼雉竹林の裏より飛出来りて一休の袂衣の袖より
まろ。谷口呌とめて。目に涙と流る。一休手とりて。雉の背と
かき。お木も二体の仏と云ふ。成仏と祈り。うとのさまのて。まう
お三輪いひめてのさ。此雉は乃是汝が父竹齊が再生なり。時盲なるへ
其証とし。亦六が為。雉と見。うらきて。非業。死。因果に。うて
雉は生孫杉太郎。小地の難と云ひ。此家のうづと云ひ。れど。お母子
は馴。あつむ。子や孫と。うら。と云ふ。涙。迷の。あ。う。の。さ。ま。へ。

お三輪いひ。さ。う。う。此。お。に。お。初孫の生立顔と見ぬ。さ。か
お。あ。べ。さ。に。あ。づ。痛。や。と。い。雉と抱。あ。て。前後不覚。泣
倒。れ。亦。六。の。膝。を。さ。う。う。い。わ。て。さ。さ。小。落。涙。う。う。一。休。ま。う
の。さ。う。沙石集といふ書にも。さ。う。倒。り。皆。是。前。生。の。宿。因。な。ら。う。
い。う。ん。さ。さ。さ。う。と。の。さ。ま。う。う。酒。の。間。と。さ。さ。大。盃。さ。う。て。数。五
と。さ。う。け。あ。い。舌。打。し。て。わ。か。快。く。と。の。さ。ま。う。て。十。分。の。酒。氣。と。お。び。な。う。
亦。六。が。髪。と。剃。り。剃。刀。の。の。り。と。取。上。て。老。女。の。死。骸。に。お。う。う。い。
我。汝。と。弟。子。と。と。あ。う。に。剃。度。の。剃。刀。と。う。へ。と。て。白。髪。の。髻。と
根。う。う。と。斬。ぬ。い。扇。の。も。に。結。み。て。假。の。拂。子。と。あ。い。い。れ。を
持。て。浪。々。踏。々。と。て。提。婆。の。首。と。立。む。い。て。點。一。あ。へ。べ。之。人。の。者。さ。う
引。導。の。語。い。う。う。夏。と。後。あ。い。と。耳。と。さ。さ。て。寄。居。さ。う。に。あ。へ。と。

かの拂子と打ちあひ。

極樂とつぐのわどあひに杉葉立する又六ヶ門。

とくくふくふくひ。喝と一色さけびあひ拂子とらてあひ首と打ちあひ。不思議なるあひ首の皮肉朝霜の消る如くに解流て忽一つの觸髅とあり。あひの雉の身より光明とあら。虚空とて飛去ぬやうとほむ難い。東天光と数鳴て鳥へ空と鳴りる。声にあふる元旦の東ののろろ。日の出十方世界よりあひあひて。弥陀三尊の来迎を。目前よりあらあら。提婆が悪も観音の慈悲に解脱やな一休やなてのろろ。代へ此觸髅とらて世の人に无常迅速の理と示し。かれら母子が罪障消滅の便とて。老女が亡骸へらたは葬得とせよとのろろ。か乃觸髅と杖の頭よりあひあひ。これ見よや人。一夜あられ元旦とて又晦日乃

来べき心も。玉椿の八千代と祝て目出ととこふけとも。朝顔の

日陰まる間も定るは月ととるも。万の夏を忌おそれ蝸牛の角は名とあつそひ。蠅子の頭の利とむさがり。秋風の心へ處をりもあひ愚さ。此より目出て丸のし。これこそ目出ととる。門松の冥途の族の一里塚とて。人のおろろ。

歩用心

しのふひ。飄々として亦六ヶ家と立出る人。明や空のけしき。昨日よりうらうらとええねど。ひたえてまじまじ。大略のさな松立け。花やふくま。げる人。あか。扇く。とよ。福神双六宝。あを。うさ。ざや。うらひて。賣り。ま。千町万町の鳥追が。参り。と。う。さ。千秋万歳。徳若と打囃。傀儡師。猿。の。さ。ひ。礼者。あ。は。ま。ま。あ。は。や。る。往。来。の。中。と。



一休元且よ
 觸發とらそ
 泡沫无常
 のまど
 あつ

本草書扶卷之八

三

一休の禪師とてうて。多し用心くとのふひて。庵とてうて。今小正月三日の
 うひぬ。皆人れとひぬ。とて門。うて居る。今小正月三日の
 間門戸とて。とて。ひ傳へ。○かくて後の雉一休の庵の前は落て死なれ。
 一休これとて。ひ。提婆が禪師とて。埋て一ツの塚とて。杉立る
 門とて。歌の意とて。三株の杉と植て塚とて。うて。當国交野
 郡のうち。甲斐田と片鉾村の間。三本杉雉子塚とて。是。諸
 亦六の老女の死骸と山城河内の堺洞巖と葬る。後其所と焼が懐さ。
 又彼亦助が笈と野外に埋て卒都婆と建これ。一ツの亦助が菩提の。
 ニツの雉雄の雁の為る。中野村の雁卒都婆とて。是。少
 ○原此柳史へつ。物語る。言の。一休和尚の道德神妙の真面
 目と知ん。と。実記と載所と探る。実。是。わ。ぎ。た。と。活。師。り

三玉靈龜圖
 此圖の本文は管のつとて
 此一部の巻末と祝して
 面をへせり

千歳壽因
 能養氣
 七占卜者
 善通靈



○此後小山三亦六と具して旅立折琴姫をいかに不破番作が行方と
うづめり。夏。僕同助折琴姫と守護して古郷かゝる。姫男と産
北岩倉の宗玄柴船の名香とあつて折琴姫は再會し。姫と
あやゆも夏。附。朱雀の宗玄火のいれ。前司太郎筑紫は赴
呼子浦の獵師荷太夫が婿となりて光作と名をあらはし荷太夫が
娘遷標と妻とさる。夏。雉川國貫折琴姫と捕んと。同助姫と
守りて筑紫に落行姫と前司太郎にあらけり。夏。遷標旗
の夏。附。筑紫の不知火のいれ。小山三出雲の旗國と妻とさる。夏。
亦六が一子杉太郎成長して新竹齋と名告。奇妙の因縁をあらし。
狂歌に堪能の夏。附。白眼之助とら。奴僕の夏。小山三番作と打て
母の仇を報夏。小山三前司太郎同助亦六等。旗國とはる歌舞妓
踊に託して國貫の鼓に入こ。國貫と打ち。幼君と代はる。
仇々木の家と再與さる。夏。附。旗國歌舞妓の由来。蜘蛛乃方
以下の悪霊等。一休和尚の清度によりて成仏さる。夏。乃。ひ。
六巻ふりて續編と。他日発兌とさきなり。

本草綱目拾遺卷之八

三十四

江戸

醒醒齋山東京傳編



一陽齋歌川豊國畫



傭書

橋本徳飛

剖工

小泉新八

稻妻表紙

續編

山東京傳著
出雲於國物語

一名折琴姫全傳
全部六冊

歌川豊國 畫

来午冬出版

○山東京傳著述讀本 各所書坊述刺目錄

腰筋逢夢石後編

歌川豊國畫 中本三冊
鳥獸 魚虫 草木 器物 類々 及び こと いろいろ あり 一き本あり

夕霧物語

歌川豊國畫 全部六冊

道成寺物語

歌川豊國畫 全部六冊

女豫讓檻穽物語

歌川豊國畫 全部六冊

一月本 卷之八

三十五

骨董集初編 大本 五冊

此書は珍書奇畫古製乃衣服雜器の類を諸名家の
秘蔵所索数部乃珍書を引自の考とて古書畫古器の類
圖を漫録好古の書に追々めづりて古書畫古器の類
好事家の鑑定を経て物集りて同近日出版仕
此書はひも古代のありと目下見るが如き珍書なり

京傳店商物口上

○きき地紙ぬきと入させる類當年に別とあしき
風流の雅品はまじ仕入の○京傳自畫讚扇たんとくもりまぜ繪品々
讀書丸 壹包 〇第一氣をきくし物あえてし心腎のきよそん
あきろの老若男女常小身とくどあつて心と芳をる人用ひてよ
大極上品奇應丸 せんに敷あわね葉るれども私方へ家傳の葉種はくえん冬
くまのぬきやうの敷あわねとんせど正んてえしひきて極品の葉種をのり
調合せしむにせんの敷葉とん切結格別なり 小兒無病丸 小兒万病の
京山篆刺 水晶調下古て近て好にまてて刺をろく石 白字ミト△價を定めて
すいりてんきとあり仕は

早引人物故事

東都關惟充著
横本全二冊

△人物故事とて上古神代より近世までの中々
帝王公卿地土人等和歌傳文のき名ありい名僧
賢士の畧傳より平朝傳門医学系人傳沙茶士
列女の傳紀とて一覽。武勇勇士豪傑強敵
小伝とて人々もきく。事歴時代をわ
き説とて畧々。いもむき名はる人々
好士の戦ひ傳傳優まつるき名とりく
傳つるのき載つまじくわう。且素る小近きと
要し。いろはとて部類とてしらた人々保賢三郎

所とぬぬに先け書は授く畧傳と云うを救部きうぶの群ぐんと
 同いさうの費ひへるゝ事ことふ故ゆゑに早はやの大金たいじんなり

浪華書林 岡田群玉堂主人謹誌

阿古義物語後編

全傳六本

出来 本町庵三馬遺意
狂訓亭主人做綴

前編世ふけりてと既に来りてこの局成法のみ
いふにきまを婦女子の書林をはりて
わきど二馬先生筆成たりて著作ははそむに
看官は遺憾催促阿古義は浦の度なる門人三馬より打
のり口授せしめて條文をもくこの編を綴りてまは式亭の役と
あふ只文章の拙く罪なりと云ふ編の水碓のりとも
楚は某女千騎が山谷に捕はるる成始り二助狼の神通仇を打乃
一條亦床世女生肝をとりて段并才天女は灵感神徳忠孝節義を
たてしめいと多きはめり路を草紙あふ

三驚改

楚満人をす

文政 倭節用集悉改名人成

大本 全

△世小節用の大冊多しと云ふも古板のまに増補して再刻の物を
字形易き且服工庸書の漢字少きうに倭節用ハ系師
侯師通事の作して字畫音訓を續後々穿に悉改正
てし加育季香大人様もついの今古異同と校補
雅俗の文字りうに増益してせられふ最後の余紙紙書
ぞ小和漢の山川名取同系事筆と書き世界万国日本國
やび系江戶大坂市街案内國郡を付洋式漢式を馬
の圖式太刀目編婚礼進物の徳めうに和漢勇武は乃
備係畧傳も添綴し諸れういの注釋中妙料理献立

五花生華葉湯委其基人相々勸指南。三世相方位日
 取吉也。美樹刻掛。堂上官威の沢百官名氏苗字四季
 往來書狀案文も形枕文雛形。名案切中。韻鏡の口傳
 諸府抄案呪術傳。刀根古今鑑。く暇りの家。年中約め
 三代武將傳。神代より當時より教ふ載の伝説ある
 事。福智微細ふき。そ外世俗要用の雜事。夥々集む
 文人雅客。信文房小流。遠忘のふ不使。大なる益あり。右巻
 下の目錄。一巻として口受。更祝近讀。に教ふれ。常々
 益々熟讀。くく師より。讀てよ。道の上を。進め。右巻
 今や。こ南里。より。主人増補。して凡三百五十余紙の大事。



浪連書林群玉堂

河内屋茂兵衛版
 毎巻通

角倉

一冊

